

ちの内には有るからは筆に極まつた。何ぞ動きは取まいがな。地 取出す清書朝吉は。詞 コレはゞ様。ありやわしが書いた清書。嘘なら書いて見せふか。地 砂にありく御あり家。器用が仇しらぬ子の傍に老女は身に冷汗。見ぬ目にもる血の涙。野邊の草葉やひたすらん。詞 何ぞ老女。子供正直證據の清書。旅宿において詮義を遂ん。大事の小忤ソレ引立てよ。地 下知に志度兵衛朝吉を。小臆にかい込つゝ立てば。詞 のふコレ必其孫に。怪我ばしさせて下さる。地 な。目は見ぬねも前後に氣配り。胸は千萬無量業。一時に報ひ來るか。思ひの耳をつらぬく大勢。あゆめ。ハイ。歩め。是非なくも追立られて。三重 立歸る。

貧女一燈の段

海道 行も浪かへるも浪の舟長や。漁る業に馴て住む父。讃岐の濱風を防ぐ。屏風が浦さびて。煙詰しき灌漑。岩間もしやれて物すゞき。地 石に刻める閻魔王。蠅から屋根も所がらかつき手ぐりの

婆娑が。てんでに捧々花供物線香抹香くゆらせて。さりや一ふくご寄ごぞり。詞 コレお谷女郎此屏風が浦は。弘法大師様のお産れなされた所じやて。此閻魔様を拵へ。毎年飭るも罪亡し。けふは七月十五日地獄の釜の藪入り。其様にわくせさせず。マア休んだがよいはいの。オ、それく。善通寺で大師様がお勤めなさる、盂蘭盆の萬燈會。何が四國の分限者達かさし上る燈籠。貧乏なこな様も上げたい云はつしやる故。こちらが出し合ふて買て來た金燈籠。盆の祝義に進せる。地 差出す燈籠お谷は嬉しく。詞 コ、是は忝いお嬉しうござります。地 押戴けば。詞 ア、いこしや朝吉を産やつてから。生れもつかぬ吃りの病。其かはりに坊主か發明。折敷に砂を入れて色々の字を書た。閻魔様の前で鬼事じやの佛事の。がきらを集めて地獄のまね。此浦中が後生氣に成るも。皆大師様此四國の地をこそくおあるきなさる、故。けふあすは殺生も休みなりや。此間から覺けた大師様の御和讃唱へて藪入せう。ドリヤ往にませう銘々に。地 口輕氣かる足がるに歸る軒端も暮近き燈し油の荷ひ賣。油よふござい。地 油々ご門口から。詞 お谷様何してじや。多度六は内にいるか

こ。地云つ、這入をお谷は見るより。詞イ、エナ、何やかやの才覺に。エ、れその工面に出て留
主か。コレこな様の短い舌で吃り廻つて頼まんすがいじしさ。大まいの金三兩いふ物取かへた驚
の巢の志渡兵衛。多度六に催促しても。モ何のかのミ時が明かぬ。けふはめつきしやつきする氣で
留主の間へ仕かけたもコレ。こなさんいふ戀が有る故コレイナアさふしておくれるぞいな。幸ひ
傍りに人もなし。地ついちよこく抱付。手先を拂ひ。詞エ、メめつそふな。ナ、何さしやんす
何じやめつそふな何さしやんす。イヤめつそふな何がめつそふ。コレ嗣すゑて此首だけはり込で
居る志度兵衛じや。ツイうん云はんすりやよし。又いや云はんすりや金のかはり。屋財家財引
くりかへして。見付次第金儲になる代物を引つこらへて連て行く。サアいやか。應か返事はさふじ
やミ上り口。腰をすゑたる高ゆりす。地何ミ返事も手詰の難義。若も家さがししられては主君の身
の上夫の仇。戀欲にかけられし。憎さ悲しさやるせなく涙より外詞なし。地胸を定めて詞ソ、
、其返事は。コ、、斯、指先でかくこはいざや白浪に。漂ふ胸の多度六か戻か、つた我家の軒

詞エ、何じや。數ならぬ身を。夫程迄。お心さしは嬉しけれき。主有る身なればお赦し下され候て
申兼候へ共。大師様の萬燈會に上げ候。燈籠の油。御無心ながら。私に下され候はゞ忝く候。エ、
いやじやはい。何のこちや。頼む事は聞入れず。まだ代物をおこせは余りあつかましいはい。サ
アソ、夫は御尤。地又かきならず鳥の跡。詞ム、萬燈供養相濟候は。又思案も有べく候。
へ、ウ、ハ、、、そりやアノへお前。實誠に眞から。ほんまかへ。コレ眞實叶へてくれる氣なら
儲な心中を見せさんせ。地いふにお谷は立上り。傍に有合ふ出及庖丁。見るより悔り。詞コレコ
レ、出及庖丁の心中は。手ばなした事何するのじや。ア、アイ心中は此通り鳴田ほ
こいて根本よりふつ、切つたる黒髪を。油のかはりさし出し。詞コ、是で私が。手、願ひをばカ
、叶へて下んせ志度兵衛様。地涙はらく亂れ髪。大象ならでつながれし。鼻毛延して現なく。
詞ハ、ア出來た。萬燈供養仕舞つたら。日頃の戀の大願成就エ、忝いわい。證據の切髪受取つた。
燈油はお望次第。其かはりにはコレ合點か。手附にちよつ、地しがみつ。エ、く、く、く、押し退

けても。油荷に付く犬ならでねぶり付たる後より首筋搦んで頭轉倒。悔り女房が切髪に袂を覆ふ
斗りなり。詞 アイタ／＼／＼テモ扱も。顔に似合ぬぎゑらひ。コレマいた嬉しいヤヤ多度六か。憎
い不議者そこ動くなこ地 云はれてがた／＼震ひながら。詞 何じやい／＼そんな不埒な事した覺はな
いぞ。ヤア響ないこは泥坊め。慥な證據はコリヤ爰にこ。地 手をさし入て懷より。引出したる以前
の髻。詞 コリヤ女房が此切髪。さふして又我が持っている。サア夫は。ヲ、そうじや油代のかはりに
エ、ぬかすまい。始終の様子は見届けた。主有る女房に不義徒了簡ならぬこの件の出刃。地 追取て
ひらめかせは。ア、こりや／＼／＼こてつもない。まだお庭さへ踏みもせず。髪こ油こかへたは能
相誤り代はコリヤさふなこせう。ム、スリヤ不義の誤りに。一札書すが合點か。ハテ命がはりじや
さふ成こ。ヲ、よい覺悟じや鼻紙取出し。サアきり／＼書け。ハイ／＼書斗りならこつちの勝手
こ。地 筆取り上げて。詞 エ、誤り證文の事。何ミ斯で有ふがな。エ、馬鹿つくさずこ書きおらう。
ハイサア一つ其元内義お谷殿こ不義仕り。ア、コレまだふも義も仕やせぬ物を。不得心なら是で突

ふか。ア、コレ／＼書くわいの／＼。心中に髪切らせ候所實正也。然る上は。用立置き候金三兩は
申に及はず。油荷一荷相渡し。コリヤ／＼／＼油荷渡してたまる物かい夫取られたら商賣が出来ぬ
わい。ム、スリヤ儕。命がなふても商賣さらすか。サアそれは。たはけ者めが。きり／＼こ書きお
らふハイ。サア命を御助け下され。有がたく存じ奉り候。エ、夫が何の有がたかろ。借した金に油
荷迄。いやなら是で算用せふか。ア、コレ／＼氣の短い書くわいの／＼。お定りの三百目。大かた
そこらな物で有るこ。地 筆もぐにや／＼書仕舞ひ。詞 サア多度六是でいいか。エ、命冥加な泥坊め
きり／＼うせうこ地 戸口へきつさり投出す切髪。金 コリヤ油代に渡したら儕が物じや持てうせい。
エ、忌々した。此髪見たふもないわい。シタガ是も。其人の筐こ思へば。猶なつかしき油の移り香
こいふ古歌の心。金三兩油荷一荷のかはりこは。油むごいこ地 つぶやき／＼。杓は有れこ擔ふべき
戀の重荷もたくられて。肩に拍子も投首にしほ／＼。我家に立歸る。地 萩吹風の音づれて。いこ
淋しき夕間暮。妻は灯か、けつ。軒に。かけたる燈籠の。灯影照せ。胸の闇。地 晴れぬ思ひ

に夫の傍。詞 此切髪をお前に疑はれるが悲し。地 いふも涙に袖しほる。夫は不便に顔打守り。
詞 コレお谷更々疑ふ心はない。モよしない縁に繋がれて貧苦辛苦の其上に。御主人の命乞。燈明代
に黒髪迄。切つて捨たる切なる心。コリヤ。過分なぞよ女房共。地 いふも涙にくもり聲。詞 そん
なら私の心の内。サア推量して居るわいの。エ、嬉しうござんすこちの人。地 膝に取付きなないじ
やくり。洩聞にてや。世を忍ぶ。蟹の苦屋の一間より。立出給ふ小野の籠。重き病ふのいたつき
に。力なき身ぞいたはしき。地 夫婦はつこ座を下り。五 エ、先程から用事有て外へ出で。御機嫌
も伺ひませなんだ。が御氣分はごふでござりますな。見ますればお顔の色がわるい。地 何ぞお氣に
さはりしや。心にかぐれば筆脚。二 イ、ヤ左に有らず。我都にて無惡善三額に書きしを識者の爲
惡無くばよからんご訓みかへたる無實の罪。死すべき命をそちが情。地 取分けお谷が貧しき中朝夕
の心づかひ。表具 か、れきてしも櫛削りなでにし。髪も切捨て。世になき我が病ふの祈り。御燈を
捧ぐる大師の供養。アノ外面なる閻魔王。沙婆の善惡邪正をば。糺し給はる誓にも、洩し此身の淺

ましや。悔み涙にくれ給ふ。詞 ア、去りてはお氣の弱い。あなたの御名代には此多度六が。間
がな隙がな閻魔様へ。善惡分けて候人共を亡し。あなたを御代に出します様に。大願込めて祈つ
ております。コレ何にもお案じなさるゝな。地 力を付くる多度六が。お主思ひぞ眞身なる。地 お
谷も共に。詞 それ。早ふ御本服なさるゝやう。大師様の萬燈供養。追付驗がござりませう。オ
、そふ共。シタが。何ほう残暑云ひながら。吹放しの烈しい浦風。地 お風召すな共々に。
夫婦がいたはり介抱も。如才納戸に連て入る。山の端。出る。月影に。文彌 道は照らせき目なし鳥
壻に歸る母お丈。ナホス 手を引く孫が小りしく。詞 コレ祖母様。モウこちの内じやはいのふ。オ
、嬉しやく。コレ朝吉。跡から誰も來やせなんだか。アイこはい伯父が來たけれ。皆ここへやら
いきました。ヤレ嬉しやく。地 さはいへ油断は成まい。ふさがる吐胸門の戸を。明けて這入ば朝
吉は。詞 娣様ここに居やつしやる。乳が呑たい乳呑ふ。地 納戸の内へ走り入る。地 母は邊りを撫廻
し探り廻りて獨言。思はずけふの都の討手。志度兵衛が訴人して筆様の御身の上。此曉迄御容敷

こ。當座のが遁れに歸りしは御身がはりを立ん爲。さいはへ高位の都人のかはりに立つべき者もなし。一人息子の多度六は。海邊の育の荒くれ男。鬻こみ知なばほんの犬死。嫁のお谷に得心させ。いつそあの子を殺そうか。こはいへ不便や貧しい中。夫を大事此母に。地 朝夕つくす孝行者。殊に子も有る女夫中。何こ命が取られうぞ。成らう事なら此母が。かはりに立てお主の命。助る事はならぬかこ。返らぬこをくさき泣き。地 ア、何こせん是非もなや。三人の内に一人の命。さふで遁れぬ定事詞 兎角佛のお力こ。地 六字を杖に。タタキ。盲目の。探る手先きに一間なる。持佛の間へ入りける地 生死の境夢の世に馴し衾は鴛鴦の。諸羽はかさねの夜半の床。きぬくならで肌薄き。地 妻の別れに惜まるゝ涙に保つ一腰の。切放れよき男氣も。かき曇りたる。胸の間。地 内外見廻し獨言の。詞 今母者人の云はるゝを聞けば。篋の御身の上。若しも事が有る時は。つくした忠義も水の泡。お谷にこづくこ云聞かし。不便ながらお身がはりこ。地 思ひ込んだる心の底。しらぬ。お谷は納戸より眠る我子を抱く手も。いとたのけにぞ。立出て。詞 書のア、あがきに草臥てもふ影やつたか。ト、

、されち、ちつこの間の地 下に置き。蒲團打着せ夫の傍。詞 ココレ多度六様おまへはナ、何を思案してイ、居やしやんす。オ、女房共。坊主めは寝おつたか。アイアイ。コレ。そなたに折入て無心があるが何こ。聞てたもらぬか。アノマ。女房に改まつた。イヤサ。折入て頼まねばならぬこいふは。外でもない。そなたの命が貰ひたい。エ、ソ、それやナ、何で。オ、悔はは道理々々。御主人の篋の。けふにつまるお身の上。それ故に母者人の心づかひ。詮方なさにそなたをば。御身がはりこ思ひしも。前世の因果。約束事を諦て。潔ふ死んでたも。地 立派にいへご恩愛の。涙に妻も顔を上げ。詞 コ、こちの人イ、いさしいお前の忠義の爲。何の厭ははふいこやせぬア思へば最前切つた。コ此髪が。オ、思ひも寄らぬ燈明の價に切し黒髪は。取りも直さず冠下。お役に立てよくこ神佛の。おしらせで有ふぞい。サア。イ、賤しき身にて高位にかはるは。ウ、嬉しうてく。地 嬉し涙がくくこ跡は詞も袖にふ。見るに夫も不便さの。涙を包みオ、そふじやく。詞 變生男子の果を請て。未來成佛疑ひない。冥途の間を照すには。お大師様の萬燈會。迷はぬ様に

唱名をこ。破れ障子を押ひらく。普通寺山かうく。程を隔てし萬燈會。こなたの軒に。輝くは
實も貧女の一燈に。無明の闇もてらすなる。平等大會ぞ。有難き。盡きぬ名残。こ多度六が。お暇乞
が濟んだらば。母者人の知らしやれぬ内。云ひ残す事あらば何なり共云つて死にや。ア、アイ。坊
主めが目を覺さぬ内に。云ひ置く事は何にもないか。ア、アイ。ト、得心はして居れ。オ、お
胎に結ぶ。岩田帶。モウ七月。コ、コ、此や、を。闇路に。迷はす。いぢらしさ。ワ、わしや。
くく云さしてわつこ叫けば朝吉がほつちり目覺す寐ほれ顔。サアねんねして乳呑ふこ。
地 やんちや交りのくはんせなさ。詞 コリヤ坊主よ。是を見い。嬪の此髪がこないに短ふ成つた故。
おれが味よふしてやる程に。賢い者じや。サアくちやつこ乳を放せヨ。ム、そんならか、様の
短い髪を。おまへが長ふして下さるか。オ、長かれと思ふても。親子夫婦の短い別れ。無理云は
すこも遊んで居い。アイく。おれはあそこの佛様の前へいて。いつもの様に石積で。太鼓た、い
て遊ぶ程に。嬪様歌を謡はつしやれ。コレ。これ叩いて。取出す。手もこもりんこ持遊びの。

太鼓こつかは。折々に。此頃覺へし。タ、大師様の御和讃を唱へるも。コ、コレ此舌をまんそ
くに。おまへや坊にも心よふ。ネ。寐物語りも。ナ、成ふか。現當ニ、二世の願込してア
、、あの子を相手に。モ勿体ない。大師和讃。子守歌。オ、後世の爲。現世の名残。おれも
用意の其間。サアく。早ふ手に渡す。輪廻に迷ふ。親心。子はしら砂に持はこぶ。さいの河
原も斯く斗り。主君に母にしらせじ。奥へ氣配り。女房共。早ふ名残の御和讃を。ヤア泣しづ
むは今こなり。忠義の二字を忘れたか。阿り付られ取直す。りんの音色も。涙聲。歸命項禮祖
師大師。往昔大悲の願有れば。十方世界の益廣し。中に因縁深ければ。見始め逢初め、様の。
カ、勘當受ても添たい。子、願ひ叶ふて添ひ伏しの一つ伏屋に二世の縁。讃州多度の郡にて。詞
、子中なしたる戀中も。夕べの床がナ、名残かいのふ。屏風が浦に跡を垂れ。武官を兼し氏素
姓。顯す夫が身拵へ。妻はあこがれやるせなく。生年年五六の間には諸佛談會まし。つ。様
何で泣しやるぞ。わしも悲しう成つて來た。乳呑たい立寄るを。ヤイくく無理いふか。い

つもの様に機嫌よふ。歌を謡ふての、様になせ石積んで遊ばぬぞこ。地 ならむ目にさへ血の涙。し
くく泣て立まさふ。十より内の稚子の。河原の石を。拾ひ取り。地 一つ積んでは。こゝ様の
爲二つ積んでは。嬢様の爲。詞 オ、よふト唱へてタ、たもつた。地 泣出す口に袖を當て。エ、コレ
奥へ聞へるはい。千萬年添たきて。さふで一度は別るゝ習ひ。愚痴なくり言云はず共。サア〜。
地 覺悟こ振上る。上る刃の光りに朝吉が。かゝ様こはいこ取付を。ヤア邪魔すなこ引退くる。刀の下
に子を圍ひ。マ、マ、待てこいへこ。付廻す。輪廻の切先りんの音。母上別れをおしみつゝ。詞 せ
めて此子が。おこなしう成人。する迄。居らすこもおなかの。やゝを。身二つに産事さへもならぬ
かこ女心の悔み泣。夫も心思ひやり。せきくる涙。くひしぼる。胸は鳴戸の浦波の。袖に。渦巻
こくなり。地 氣を取り直し。詞 サア時刻移るこ振上る。地 其手に縋つて朝吉が。かゝ様ちやつこ迷
けていのふ。こゝ様勘忍〜こしがみ付いたる小手からみ。尖き刃も恩愛に。ころけ砕くる亂れ焼。
心さは立浦波にさつこ烈しき瀟風。數の萬燈一度に消ぬ。残るはお谷が供養の光り。赫々。こして

明らかき。地 多度六屹こ打見やり。詞 今の烈しき浦風に。數の燈籠消いたれき。おここが一燈残り
しは。忠貞厚き志。佛神憐み給ふよな。サア娑婆世界の苦を離れ。極樂淨土に快樂せよこ。地 又ふ
り上れば取絶る。我子をしかこ覺悟のお谷。首さし延てナ、南無あみだ佛。なむあみだ佛こ切付る
刃の光り半より。ほつきこ折て飛散たり。詞 ハテ心得ぬ。少しの疵も付ずして。此業物の折れた
るはこ呆れ。果たる其所へ。地 小蔭に忍びし志度兵衛は。斯こ見るより踊出で。詞 勘解由様の仰を
受け。密に様子を窺ふ所。古手な身代り其手は喰ぬ。サア筆を渡せ〜。ヤア一大事を聞いたるや
つ。生ては歸さぬ覺悟せよこ。地 又指添を取出す。詞 オ、手向ひせば此倅。ほうづき首を捻切こ。
地 稚子こらへ引寄する。胸もわなく後の方。弘法大師御手を延べ朝吉引取り志度兵衛を。庭へひ
つしやり立切一間。起上つて多度六に。切てかゝれば抜合せ。はつしこ打ば志度兵衛が。刀は折れ
て眞一つ。から竹割に死してけり。地 かけ上つて。詞 サア〜女房。覺悟はよいか。カ、覺悟は
よいこ潔く。地 首さし延ればてうこ切。又は又も折散れば。多度六は一度悔り。詞 最前の刀こ云

ひ。今眼前まへに志度兵衛が。刃を打折る此指添。又もやほつき折散て。そちが體からだに立たざるは。そんなら若や聞及ぶ。不死身ふししんもやらではないかないアアアそふいやるそなたの詞。舌ももつれず吃らぬはエ、あのわたしが此舌がア、ほんにマアさふして物がよふいへるぞ日頃願ひし大師様。佛様や神様のお影で吃が直つたかないなあ申し。天道様お大師様眞實直りましたなら有難ふて忝なふてお嬉しうござります。くくくヤアやつぱりほんまに直つたのじやはいなアくくエ、有難い。地 忝いこ悲しい中の。悦び涙。地 多度六ふしぎの思ひをなし。詞 吃りの難病直るこいひけはしき場所にて朝吉迄救はせ給ふ弘法大師。ホンニ最前朝吉をこ立寄開けばコハいかに人影もなくありくくこ残る六字の利劍の名號。詞 ム、扱は危き劍難を救はせ給ふ名號の德。大師の慈悲にて有しよな。イヤお谷女郎の身中には非道の刃は立ぬ筈。探し出でたる母お丈。ヤアスリヤおまへは此場の様子。オ、立聞した不思議の段々アノ名號の御利益より。空恐ろしき身がはりの刃の立ぬ因縁を今語つて聞せませふ。隠し持たる懐劍を咽にかつばこつき立れば。こりや何故の生害。夫婦あはて、取す

がりにたはりおこせば息をつき。先帝平城天皇の御寵愛の御后破軍星を胎内に。やきす。靈夢に御懐胎誕生有し三の宮必御心猛からん武官ぶくわんもなして朝廷の御守りもなすべし。我夫小野の峯守に若宮の守護致せよ。詔みことり。夫より我館に守奉り。誕生有るは御身の上。其節わらはも産落し。媚麗めいれいしき水子に迷ひ。朝恩忘れし夫の悪心。人しれず取かへは王位を奪うばはん謀。今參議さんぎも名乗は取かへ置しわらはが子。誠の天子の御胤にて。三の宮も申すはコレお前の事でございますわいの。聞に悔り多度六が。ヤア紛らほしい此身をば大子の胤もおつしやるには。證據ばし有ての義か。オ、争はれぬはお谷女郎の胎内にやきし給ふ天孫を助け給ひし天の守護。いかで刃の立へきぞ。又吃りの病ひ直りしは奇特を顯はす名號の利劍即是の佛の察智。ノフ勿体なや名號御影も偽りて持佛の下に隠し置く。三種の神器神璽の御箱。多度六様へ奉らんお取次をこいふ聲にお谷か立寄る一間の内。御箱携へ弘法大師。朝吉連て立出給へば。夫婦は又も悔り。ふしぎに不思議に晴ざりけり。大師微妙の御聲にて御身正しく天孫あまみこも疾にもしれき罪深き。老女が惡念あくねん滅せん爲め爰に顯れ神璽の守護御

身の上を朝廷に奏する時のさ、け物返すぐも便りなきは。峯守夫婦が罪滅に。普通寺の伽藍の内
五重の大塔建立。五逆の罪を助けんこ。恵み尊き廣大無邊。慈悲に洩れざる普通寺。五重の大塔建
立の因縁爰に炳然。今はの手負は手を合せ。詞エー有難き御恵み。わらはは土佐の八濱の生れ。伊
豫は夫の生國にて多度六様は讃岐の艱難。お谷女郎は阿波の國。縁に繋がる國々の。四國は四生六
道三界。火宅を放れ極樂の花の臺に至らんこ。いふも苦しき息つかひ。詞サアく申し多度六様お
谷様。せめてわらはが罪亡しすたくに切てたべ。夫がくこいふ聲も次第に弱る斷末魔。此世の
息は絶果たり。お谷は死骸に取纏りわつこ斗りに聲を上げ。貴人高位の奥様が鄙の海邊の竹住居。
目かいても見わす取分けて。不自由な貧しい營みのあけくの果はあぢきない此御最期は何事こ。悔み
歎けば朝吉が祖母様何でいたくさつしやる。必ず死んで。下さるなこ。うろくするを見るに付
け。不便さ餘るたらちねの。涙袂にせきかねて膝に淵なし。稚子の身も浮くばかり歎きける。地か
ゝる折しも表より。詞ヤアく此家の者共。老女に申し置きたる。篋の首請取らん爲鬼塚助解由向

ふたり早く渡せこ呼はれば。地一間の内より篋聊しづくこ立出給ひ。詞ハ、ア元より覺悟の我一
命。早々首を討たれよこ。地いふを打消し多度六が。詞ア、イヤく。誠小野の篋こは我事也。イ
ヤ某こそイヤ我こ地互に争ひ。詞ハ、ハ、紛らははしきうぬらが詞。コリヤヤイ。よく存じをる誠の
篋。首打放す觀念せよこ。地刀に手をかけ立寄るを。大師暫しここめ給ひ。詞ア、イヤく。篋
郷を討んこは汝が辭言。誠篋の罪科は。隱岐の國へ遠流すべきこ。市郎丸秀俊へ下し給はる帝の綸
言。イヤサ皇子の嚴命なれば是非共首を。ム、スリヤ帝の勅命は背きても苦しうないか。サア夫は
地こ詞に詰れさひるまぬるせ者。ヤ、いつそうぬをこ抜きかくる。手はなへしびれ目くるめき其儘
そこへ倒れ伏す。地奇瑞に人々驚きの。中に篋詞を正し。詞今老女が物語りに。我朝敵の峯守が實
子なれば。流罪は元より覺悟の前。三の宮には漁師の身こ。成り給ひしも時の幸ひ。朝敵じす一つ
の方便。地必ず悟られ給ふなこ。詞の内より多度六は。詞ホ、ウ我連も同じ事。始めて知つたる身
の素姓。兼て濁れる世をうらみ。閻魔王に朝夕仕へ。善惡邪正を訴へし。地立願も達しなば。追付

け朝敵謀叛の族。一ひしぎに亡さんご勇める顔色威有つて猛く實にも破軍の化身ぞ。云傳へたる
ふしぎの天孫。地 大師重ねて仰有り。詞 老女が末期の願ひに任せ。四國に四句の文々不動。八萬至
減無量罪。八十八箇の寺院を建て。地 猶も弔ひ得さすべし。お谷が供養の燈籠は。彼天竺の祇園精
舎消残りたる貧女の一燈。詞 爰に移せし良女のかゞみ。我入定に定めたる高野山にうつし取り。彌
勒の出世を値遇せん。又此一軸は四句の文。國字に和解せしいろは假名。此兒に授ければ。學びて
奥義を。地 極めよこあたへ給へば押戴く。此稚子が成長して。四天王寺の額の文字。後代小野の道
風。譽れを残す筆の道。地 弘る御法の道廣き。姿は利劍の名號に拜まれ給ふ無漏の海。浮世の海
にさすらへの。船路に出る篋が旅宿を跡に。わたの原八十嶋かけて。こぎ出ぬ三人には告よ。蟹小
船。寄する渚の閻魔王。仕へかしく多度六を。末世に小野の篋が。冥途に通ふ云傳ふ謂は斯ぞ
有がたき

行法争ひの段

舜の日月光りなく堯の雨露潤ひなく。君賢王に申せ共。天地の幸ひ至らずして。此年一天早魃し。
民は塗炭に陥れば。天皇猶も御惱あり。第一の宮氷室の皇子殿上に出御有れば。左右の公卿中臣藤
原の淡海公。左大將橘の逸勢。其外文武の官人達列を。守りて座に着き給へば。地 淡海公笏を正
し。詞 今年いか成天災にや。春より夏に至れども雨一滴降る事なく。萬民の歎き大方ならず。地 諸
社に奉幣和歌を手向け。雨を乞へ共願なし。詞 依て有驗の高僧を撰み。東寺にある弘法大師に。眞
言秘密の法を以て祈らせん爲。使を以て召寄せたれば。地 追付參内有るべし。地 仰を聞いて橘の逸
勢。詞 コハ淡海公の仰共覺せず。弘法大師東寺の住職たれ共。奇特の程はイヤモ覺束なし。當時修
驗の妙術有り。西寺の守敏僧都こそ種々の奇瑞を顯せば。彼に仰せて然るべし。今朝參内して禁中
にあれば。是を呼んで勅詔の趣申し聞すべし。ヤア／＼官人。守敏僧都を是へ呼べ。地 詞の下よ

り呼次けば。程なく西寺の守敏僧都。皇子の勅願ゆるしの色。衣の袖にいら高の珠数を欺くいが栗
天窓。召に應じて参内ミ殿上の座に押直れば。地 逸勢見るよりホ・ヲ太義ノ。詞 此度四海旱魃し
民の艱難救はん爲。貴僧の妙術にて雨の祈りをなすべしミの勅諭。謹んでお請有れ。地 云合せた
る我工み。降さぬ雨を祈らす空頼みこそ恐ろしき。地 かゝる折しも庭上より。空海只今参内ミ。
地 披露の内より。東寺の住職弘法大師。香染の袈裟衣。菩提樹の珠数つまぐりいミ珠勝けに座に着
き給へば。地 淡海優美の御聲にて。詞 いかにも大師帝の御惱重らせ給ふも今年大きに旱魃し草も恵ま
ず五穀は實のらす民の飢渴を歎かせ給へば。地 自然ミ宿慮穩ならず急雨の祈りをなし四海の歎き
を助くべしミ仰の内より逸勢が。詞 イヤ暫く候淡海公。雨の祈りは臣が執奏致せし守敏僧都に申付
る。空海へ勅諭はお扣へ有れミ留むればイヤ此義は淡海が取り成して。イヤ某がミ双方より互に争
ふ依最負既に斯よく見ゆにけり。地 皇子聲かけヤア兩人論は無益。詞 兩僧の奇特を爰で驗し見て勝
つたる方に申付ん。ソレノ誰かある。提を持つてミ有りければ。地 ハット答へてめのわらはひさ

けの水を持出て御前にさし置けば。地 鍋の鉢にざんぶミつがせいかにも兩僧。詞 此鉢なる水を以て威
徳を見せよミ仰ある。地 はつミ守敏は承り。詞 何より安き詔り。イデノしるしを見すべしミ。
器に向ふ邪法の妙術。手先に結ぶ水の印。數遍誦誦の秘密の呪文。暫く唱へ公卿に向ひ。詞 イカニ
方々御覽有れ。早つゞきし此炎暑に我法術を以て。冷水を氷ミなして候ミ器の水を臺の上きらめく
氷はさながら富士の雪にぞ異ならず。地 皇子大きに喜悅あり。詞 氷は則氷室の我名。祝せし發明
修験の妙術。此上や有るべき空海いかにミ有ければ。地 大師につこミ打笑み給ひ。詞 馬鳴惟を褒れ
ば鬼神去て口を閉ぢ。梅檀塔を禮すれば支提破れ屍を顯す空海なくんばしらす。童すかしの戯れ事
地 イデ正法の奇瑞を見せんミ。口に三摩耶眞言加持。守敏が凝たる呪法の氷忽ち元の水ミ消。邊りへ
流れこほれける。守敏は拳を握り詰め珠数も碎る無念の齒がみ。地 皇子怒りの顔色にて。詞 ヤア奇
怪なり空海。鷹が一字を祝せし氷。目前にころかす呪咀の大罪目に物見せんミ威丈高。地 淡海しば
しミミゝめ給ひ。詞 コハ皇子の仰共覺す。守敏が術にて氷し水。空海が法にて解けたるは是正しく

理の當然いづれ勝劣定めがたし。地 法論の争ひなく神泉苑に壇を築き東西に立別れ雨の祈りを行ふべし。帝にかはる大臣の仰にはつゞ領掌し大師御座を立給へば。守敏逸勢目々目を見合せ。思へば無念ごためらへば。皇子も今はほいなけに渡殿蹴立入給へば。兩僧威儀を繕ひて御寺を。さして三重入給ふ。地 三こはりや日の本なればあめが下。苗代水ミ様々の和歌も連歌も驗なく。猶照増る白玉に。ぬぐへき露も置かざれば。陸地もさける斗りなり。東寺西寺の兩僧へ。勅命下る雨乞を。見物半分參詣の群集を當に築地の外。地 茶店も皆々寄りこそり。詞 扱マア何ミ降らぬ事じやのふ。諸方の田は植付時分。百日餘の大日照で。井戸にも川にも水氣ミいふては。陰虛火動の世界の煩ひ。此仕舞はマアさふ成る事。地 三こいへば一人が。詞 ア、コレく其爲に帝様からの勅説で雨の祈り龍神や龍女達がみつこい水は減さぬ。くいしばつても。詞 生佛の弘法大師。美僧の上に眞言秘密。獨結の先でやらかしたら。いかな龍女も取りはづしてついきかく。降ぞいの。イヤくくアノひがいそな大師様より。油ぎつた守敏僧都。地 血氣さかんにもみかける。いら高珠數の鹽梅があつ

ちの請がよかるそや。詞 ハテ蓼喰ふ虫も好々じや。見るから意地のわるそな僧から。何ほふ名が守敏でも。年寄りの小便程も雨ふらす事はならぬわいの。只有がたいは大師様。あなたのお影で追付大雨。皆信心をしたがよいてや、ハテこなたはわらい大師びるき。そふいやりや猶意地じや。守敏様が勝じや。イヤ大師様が勝たしやつたらさふしてじや。イヤ長兵衛殿。長兵衛め。餘り願があがき過るぞよ。守敏様の事に付いては命でも上げます様に思へばこそ信心するじやないかい。夫をおれが知つたかやい。サ、しらぬよつて云ふて聞かすのじや。モウ云はん聞分のない者に。千萬云ふてもこつて牛の耳に風。随分大師様の腰押よ、知れた事畑仕業もほつて置いて。随分貴様の邪魔せうわい。守敏が小便しかけうがごいつか掴みかゝらふが。横鉢巻で慥な請手。へ、畠中で牛こそ牽。馬には乗つた事のない男。珍らしう踏まれて見よわい。見るか。見せふ。地 互に悪口ちやはく。茶碗。コリヤ長助長兵衛此茶碗の様に物事が。丸ふいけば重疊。ア、コレくいかに雨からおこつた事じやて。破れてはつがれぬ其茶碗一文にもならぬ事。そんな事云はふよりマアく

しづまらしやれ。引分けても。地 割るかたたくか益体やくたいに。喧嘩けんわの最中。地 鐵棒てつぼうの。音おとに皆々悔りし。そりやこそそこへお役人。見付られてはたまらぬ。誰が分けねき憶病者おくびやう皆ちりぐに逃げ歸る程もあらせすのつさく皇子の家來松森忠太下部引連れ出來り。詞 ヤイ侍共そち達も知るごこく此度の早魃かんばつは皇子の計略雨けいりやくの祈りいふは表向。守敏僧都が降らさぬ祈。時のはづみに三粒さんりゅうでも降ご勝手が悪い。さかく邪魔に成るは弘法大師。折を見合せばらして仕まへ主人の云付。随分ぬかるな者共。地 しめし合して大ぜいが。神泉苑しんせんえんの外構そとがまへ打連てこそ。三重 急ぎ行く。

雨乞ひ祈りの段

地 頃は天長元年五月中旬大地も裂ける炎天に。雨の祈いのりの勅を受け神泉苑の東方には東寺の住職弘法大師。眞言秘密しんごんひみつの檀だんを築き。天に轟く讀誦とくじゆの聲こんづを流してせめかけく祈り給へばいかでかは天の擁護ようごのなからんや尊くも。又有がたし。地 暫く息を繼つぎせ給ひ。詞 アラ心得ぬ此有様今朝辰の刻

より今未の刻に至る迄。肝膽かんたんくだきて祈れ共、明王の靈驗れいげんなく。一片の雲さへ見へぬ空のけしき。扱は我法力の劣せうしか。地 少し憤怒ふんぬの相を顯し檀だんを守つておはします。地 かゝる所に庭上へ。御見熊若丸息を切つて驅け來り。詞 我師の僧の仰を受け守敏が行法窺ふ所に修法しゆほうを行ふ体もなく一部の讀經とくけいも仕らず。只優然ゆうぜんに安座して。地 空しく彼が身の振廻ひ子細有らん存ずれば。地 必ず御油斷有まじご謹んで訴へれば。地 大師頭を傾け給ひ。詞 我今朝より怠りなく。一心不亂に祈れごも小雨一滴ふる事なし。守敏も同じ勅命受れば。共に祈りをなすべきに。さはなくして我に祈らせ。其身空しくある事は。いかにしても心得ず。地 又も汝はかしこに至り猶も様子を窺ふべし。早くくご宣へは。はつご領掌熊若丸西方さして驅け行ば。大師は又も勸念の檀だんに上らせ給ひける。地 されば西寺の守敏僧都雨の祈の勅を受け。神泉苑しんせんえんに至れ共法を修すべき体もなく。壇上だんじやうに腹這し空うそぶいて居たりしは不敵なりける。悪行なり。地 ささかほるこめ木の匂ひ。案内にて。氷室ひむろの皇子わらうじの召使めし荆穗つばきの局つばきはしごやかに。長柄の銚子土器てうしちかほりを。仕丁に持せ入來り。詞 皇子様の仰を受け参りしわら

は。苜蓿の局を申す者。地ひめもすの御勞お心を慰めん。送り給ひし此御造酒御頂戴さし置
けば。じろり見やり起上り。詞コリヤお心を付られた皇子様の賜賞致す。知らるゝ通り雨の
祈は表向。空海一人にもばらせて。雨をふらさぬ心さよ。併し今朝よりたつた一人ヤモほつゝ退屈
そもじを相人にイザ一献。地ドレ盃を取上ぐれば局は丁ごつぎかくる。チ、有るぞくゝそもじに指
さうごつぎほし。詞誠に上戸は罪敷さるゝはよふ云ふた物。サアノ、一つ參れ。左様ならお戴
き申ませう。ドレくお酌仕らふ。ア、申し一つござりますわいな。オ、見事く。最一つ重ねて
ア、いやもふお敷し下さりませ。然らばお間引受くつゝけ呑み。早縫れ出す巻舌に。呑めや、
く。こかく浮世は酒の事。地さいつおさへつ數重りて。互に心亂れ酒。膝にもたれて夢心地。
打まけてこそ眠りけれ。地東の壇には弘法大師眞言秘密の神通にて暫しが中に三千世界。内海外海
を御覽あり。ハ、恐アろしく。詞憎き守敏が邪法にて。三千世界の龍神共。悉く封じ込めたれ
ば。雨の降るべき様もなし。され共天無熱地の善女龍王。守敏が力にあたはずして。洩せし故に

龍王此地へ來りて眷族を致はん。彼を祈つて力を合さば雨の降らざる事あらじ。地イデ法力を
顯はさん。壇に向ひて鈴打振り。詞東方に降三世明王南方軍荼利北方夜叉西方に大威徳うすさま
明王金輪王の名號唱へ請雨經。地讀誦に碎く肝膽を。天地感應時至り。俄に一天かきくもりふりく
る雨は車軸の如く。篠を亂してしだらでん。忽潤ふあめが下。民の悦ぶ諸聲は爰に響ていさまし。
地門外より數多の百姓皆一樣に蓑笠かつぎ。米麥大豆餅干菓子。てんでにさけ御前にすへ。詞大
師様のお影にて。百日降らぬ旱魃の。地不作が返つて大豊年。冥加の爲の捧げ物。ミ皆を一度に。
禮拜し有がた涙ぞ。道理なる。地大師大きに感じ給ひ。詞殊勝なる汝等が行跡。愚僧が祈りも感應
あり。民の塗炭も遁れたれば帝の御惱も平癒有らん。此旨禁廷へ奏聞せん。地猶も農業者なく。
祈りの壇をおり給へば。皆々跡に付そいて。御寺の方へ三重送り行く。地西の壇には守敏僧都。虛
空をにらんで憤怒の顔色。詞ア、ラ心得ぬ此大雨。我皇子に一味して天皇を練ません。内海外海
の龍神共水瓶の中に封じ込。雨の降べき謂なし。又怪しきは女が振廻ひ。我に飲酒を深く進め油斷

を窺ふ有様は。正しく敵の間者ならん。白狀せよ地怒りの大音。詞云ふにや及ぶ官女ミ成つて來りしは北天竺の善女龍王。弘法大師に力を合はせ雨を降らし世界を潤ほほし。民の歎きを助けし地。地聞よりハット驚く守敏。膽に銘じて搦とこそく。詞三千世界の龍神共悉くかり込めたれ共。佛一正手に廻まらす。遁のがせし故に此妨さまたげ。地イデ龍神共平らけんミ明王の利劍。おつ取て。女を目がけ打てかゝれば。有合ふ長柄にはつしミ受留め。詞ヤアおろかく。汝が封せし眷族共只今助け返さん地。地かたへに直せし水瓶目かけ。持つたる長柄を投付くれは。忽ち邊り震動し雲うるに稻妻はた、がみ。女が姿きわ失て蛇体は虚空こう。登りけり。地守敏猶々怒りをなし。詞たミへ大雨ふるミても空海始め天皇方。悉く調伏して立所に取殺さん地。地いふ間有らせず攻せ鼓。勢ひ込んだる官軍勢。関せを作つてミつミかけ寄せ。詞皇子に一味の守敏僧都覺悟くミ詰寄すれば。詞シヤ物々しき罪人めら。地いざミいやつミ利劍を打振りはらりくミなき倒し。爰をせんミ、戦ひしはすさまじかりける有様なり。地天に逆さかふる冥罪めいの今や報むふミしら羽の矢。空中より飛來り胸板はつしミ射通せば。

詞ヤア何やつなれば卑怯ひけの至り。是へ出よミ呼はれば。ホ、ウ其矢の主は是に有ミ。地忠臣の淡海公。親王伴ひ立出給ひ。地イカニ守敏。汝異國の王孫みして此日の本を傾けんミ。皇子をかたらひ邪法を行ふ。運命盡きて皇子逸勢はなりも擒とりミなし。照日の宮に御即位あり。最早惡念發起せよ地。地仰の内に弘法大師。又もや爰こに顯れ給ひ。詞四海は雨に潤うるへば帝の御惱うも忽たち平癒。愚僧ぐは是より高野山に登り。地三會さんの曉待あつべしミ。仰は盡させぬ御法の榮は。詞守敏は無念の齒がみをなし。詞佛法王法破却はして魔界まなさんミ思ひしに。事ならざるは殘念至極。是迄なりミ觀念し。利劍を首に押當て。忍しのいミくミかき落し。忽たちび失せにけり。地僅ただ西院の村中に守敏の墓は名なのみにて大師の徳はありミ。東寺の塔の影かげうつす。民百姓の家居迄。崇あめ尊たむ真言の榮さかゆく。末すぞ三重有がたき。

紀の路物狂ひの段

諸抑地を走る。歌。空をかける翅迄。親子の道の哀れさは。心なしとも云ひがたし。地草木は雨露に榮む行く我は。子故に亂れ髪。詞論。是は佐伯何某の妻のなれの果にて候。地我子の行衛白露の置所なき。身をいかにせん。誰かは我をさむらん。浪路隔てし由良の渡を。明暮我子戀しや。思ひし事の積り來て。衰へ果し身の恥かしや。市女笠。諸覆ふおきろの髪亂れ。くして立出る。地船路は人の情にて。渡る浪花の梅が香の移る袂のなつかしき。昔は花の面影もいつの間にかはみつわぐむ。生者必衰のこころは只目の。前も浅ましや。因果は廻る小車の。わたちの水の行末も終に。生死の海深く。山さし高き恩愛の。積りくして今の身は。かやうに物に狂ふぞや。歌三下り心の闇に有らねきも。迷ふ思ひぞ色も見る。よその見る目はナ。戀も思はゞおかし恥かし。夫が眞實ならば。そこのナなんく情の。夫が誠かてん。誓文我思ひほんにへ。ほんにくエ愛が中にも樂しみ。狂ひ勢れて臥給ふ。地それ釋尊の古へは。やしゆたら女さいふ婢もあり。らごら尊者さいふ子迄。産しておいて得手勝手。精進潔齋何事ぞ。つれなの佛も仇口に。述懐まぢり打通る。身は白無垢に袈裟衣。首にわいがけ高野から。旦那廻りの戻り道。地夫も見るより阿刀の方。のふ我子か取廻れば。若僧つくく打守り詞何を云はしやるやら。こなたの様な母者を。持った覺へはない。そりや大きな坊主違ひ。外をお尋ねなされよ。地空うそむいて。居たりける。地母君は涙ぐみ扱もつれなの我子やな。稚い時に別れても見覺のある天童丸。名乗給へこ有りければ。詞ア、めつそふな。覺もない名を云はれて。胸が顛倒仕ますわい。天童丸の。舟頭丸の。大船の様な兒は聞いた事もないわいの。イヤくさないひそ。得道して今の名は空海和尚。親の身して知るまいか。是は又迷惑な。最前峠の茶屋で五文取り二つの腹。空腹にこそ有る空海は云ひませぬ。いでく愚僧が身の上を。語り申さんお

樂しみよ。その見る目はナ。戀も思はゞおかし恥かし。夫が眞實ならば。そこのナなんく情の。夫が誠かてん。誓文我思ひほんにへ。ほんにくエ愛が中にも樂しみ。狂ひ勢れて臥給ふ。地それ釋尊の古へは。やしゆたら女さいふ婢もあり。らごら尊者さいふ子迄。産しておいて得手勝手。精進潔齋何事ぞ。つれなの佛も仇口に。述懐まぢり打通る。身は白無垢に袈裟衣。首にわいがけ高野から。旦那廻りの戻り道。地夫も見るより阿刀の方。のふ我子か取廻れば。若僧つくく打守り詞何を云はしやるやら。こなたの様な母者を。持った覺へはない。そりや大きな坊主違ひ。外をお尋ねなされよ。地空うそむいて。居たりける。地母君は涙ぐみ扱もつれなの我子やな。稚い時に別れても見覺のある天童丸。名乗給へこ有りければ。詞ア、めつそふな。覺もない名を云はれて。胸が顛倒仕ますわい。天童丸の。舟頭丸の。大船の様な兒は聞いた事もないわいの。イヤくさないひそ。得道して今の名は空海和尚。親の身して知るまいか。是は又迷惑な。最前峠の茶屋で五文取り二つの腹。空腹にこそ有る空海は云ひませぬ。いでく愚僧が身の上を。語り申さんお

聞きあれ。文彌か、り父は紀の路の何某にて人にしられし土ほぜり。地母は。學文路の飯盛で。假の。契りのこそ出合。我等を儲け給ひしが。六つの年から。地お山へ登し。手習ひ學問夜々は。師の御坊のお寢間のさぎ。暑いめつらひめ痛いめの。難行苦行の功積り十四の春から得道して。芋ほり坊主味噌摺りの。らいほんごこそ。申なれ疑ひ給ふなご。始終りの物語り。地現なき身も聞し召し。詞扱はそなたは空海には有らざるか。オ、しれた事いの。ム、そんなら我子の居る山へ。サ早ふ連れていきやく〜ご。地胸元取てふり廻せば。詞ア、コレ〜そふ振廻はされては。袈裟も衣もせやくちやに成るわいの。最前から聞く様子が我子の行衛を尋ねての物狂ひ。扱はこなたはお氣ぢやの。アいごしやく〜。旅は道連れ世は情。ドレ連立て往て進ぜふ。サそろ〜ご歩まつしやれご地いたはりすかし伴へば。地いつ迄物を思へごや。ささる跡より。又もせめ來る恩愛に。かゝれる雲のたわ間より三輪も初瀬もよそに見て。紀路の遠山。春霞梢に立てそむる。木の芽峠にさしかゝる。詞ナコレかみ様。是からは山道じや。怪我せぬ様にそろ〜ごあるかしやれ。ナニ山路ごや。ソ

レ誰か有る乗物もて。エ、太平樂な。ごこに乗物が有る物ぞ。そんな事云はずごサ、あるいた〜イ、ヤ長の鄙路のいたつきに。いかで山路をたざるべき。イザさく〜ご有りければ。詞ア、こまつた物じや。忍いは蜘蛛輿になご乗せてやろご。いふて爰は山中か。ヨシ〜おれが昇は。サア乗らしやれご地辻竹輿にうつす風情に持なせば。地現なき身の夢心地。エイサツサト〜。ソレト〜またけじや合點か。エイサツサト〜。歌坂はてる〜ナアンアエ。鈴鹿はくもるナアンアエ。是わいな。ヲツト杖しよかい。詞コレト〜竹輿も窮窟にありてちごあるかんせ。エイト〜サツサツサ地笹原檜原踏分て登れば下る谷川の。流れに漲る水の音。扱は川にて候よな。詞あなたの岸へ行者ぞ。地渡してたべご宣へば。詞何じや川じや。又かいの。エイハ。船に乗しよ。合點か。ヤツシツ〜魯拍子立押ししてのこ。ヤツシツシ〜。やんらめでたの若松様よ。ノンエイ〜枝も。榮ゆる葉もしける。詞サア是から堤じや一引きひかふ。掛取つたりギリ〜。エイ〜も掛々々。エイ〜。ソレあたるぞ〜。船が着いて候。御上り候へ。そろ〜陸路おひろいご地誘ふ手

先ふり拂ひ。詞 アレトくく。我子はあれに。ドレまに。アレ。アノ松に。此三鈴の松に申すは
地 佛法成就圓滿の印を爰に残せよ。彼唐土より投げたりし。山鉦の松にミッまるは千代萬代も盡
せじな。落葉さらへる賤の子が拾ふ木の實は何々ぞ。歌三下り 去年の古枝の。實なし栗。いちるは
しばみ山がらの。うつせ。ぐるみや姫ぐるみ。さん栗までがしちの實。あさる小鳥の ナホスしほ
らしや。小がら四十がら五十がら。からくく。笑ふ聲さへ物凄き。山里も過ぎ川柳。亂るゝ来
のよるこなく。晝も分かぬ有様に。狂人くるへば不狂人にも狂ひつ行なやみいさめなぐさめ諸
ともに學文路の。宿にぞ三重つきにける。

花坂のだん

地 されば眞如平等の。松の風。峯を。靜に吹きわたる。法性隨緣の。月の影。谷に限なく。照り増
り。三會の曉まつこかや。御法の聲の高野山。霞を分けて。阿刀の方。ふみもならはぬ足引の。山

路を埋む白妙は。雪かまがふ。花坂や。雲路を。分けてよち登り。こある岩間の片かけにしばし
仆み給ひける。地 あなたの峯より岨づたひ。阿波の船長徳又は。菩提の道に心ざし。弘法大師にみ
やづかへ麓に出る暇にも。光明眞言つぶく念珠つまぐり歩み寄り。詞 ア、珍らしやく。佐伯
の後室阿刀の方様。爰へは何しにお出なされし。地 尋ねにこなたは現なき。御心にも忘れぬ因み
詞 そなたは阿波の徳又よな。我子大師は此山に。有りこ聞くよりあこがれて 爰まで尋ね來りしぞ
案内召されこ有りければ。詞 成程く。母御の身で逢たう思召は御尤じやが。是から先は女人禁制
慈尊院へ下つて待つてござりませ。私が大師様に申上げ。つれ立て参りませう。地 サアお下りこす
むれば。詞 何みづからに歸れこや。つれなの人の心やな。地 此高野山の開基こなる。空海を産し
母なれば。詞 女人禁制の地なりこて。何か遠慮の有るべきぞ。地 云ひ捨て立たんこし給ふを。詞
ア、誠相な事おつしやります。妻子珍寶及王位こやら申して。親子他人の差別はない。地 地こ
へば是こ山櫻。一枝折つてこれ御らふじませ。詞 此花はうるはしう見わたも。夜の間に雨か風が有

る。つい散てしまふ。そこをさこつて大師様は。此山へ入定なさるゝ生ながらの如來様。もふおかくれなされたと思召し。此花をかたみこ見て。そろくお下りなされませこ。地 渡す櫻をうち守り。暫しながめておはせしが。又思ひこむ愛着の。我子に引かるゝ輪廻のまよひ。逆だつ心のみだれ髪。面は忽ち緋ざくらを。おつ取りのべて岩角に。はつしくこ打付けく。落花微塵もなけ付けて。二足三足かけのほれば。地 ノフ待給へこ徳又がすがる袂をふり切り。く。みだれみだるゝ春風に道ふり。埋む花坂を。踏分。く一筋に。猶山深く 三重 入給ふ。

(220)

高野山萬燈の段

濱地 かよはき女のあなうらに木の根。岩角きらひなく踏分。登るいたゞきより。さつこ吹き來るはやち風。震動雷電はたゞがみ。滅土もすべき有様に。地 少しも恐れず大音聲 詞 天部の種類八部の龍神。三世の諸佛も慥に聞け。弘法大師か母阿刀。登山するに障礙をなさず。速に通せよこ。地 し

づく歩む爪先に蹴はらす。櫻の花ふゞき。嵐に車軸雨霰砂石を飛す。天狗磔。久地 こへら兼て徳又は。詞 ソレ見さつしやりましたか此大時化。女人禁制の山を掟を破つた祟り。大師様の母御も有らふお身にて淺ましい邪見の心。サアく早ふ佛神にお詫申して爰を遁れて下さりませいのふ。濱 ヤア爰を去れこは思ひもよらず。是まで來ながらおめくこ。本意を達せでヤ置くべきかこ。地 又立のほる岩頭樹上。峯に黒雲立ち覆ひ。降るや火焰の雨のあし。氷の雨は大紅蓮。八寒地獄叫喚の。呵責も斯やまのあたり。さしもの母君せんかたなく。岩根に暫し身を寄て袖をかざしておはします。巴地 時に山谷鳴動して。傍なる大石ゆるぐこ見わしが次第く地上を放れ。下には大師御手をさしのべ押上給へば忽ちに。巖を山のかたひさし。御手の形はありくこ。佛の力ぞあらたなる。地 母君是へこ誘ひて。火焰の雨を。凌がせ給ひ。久しく候御母上。我佛道に心を寄せ遁世の砌より。諸國諸山に順拜して。母君に對面せず。不孝の段々恐れ入る又此山は女人禁制たる事。全く空海が私ならず。守護神穢れを忌む故なり。地 早々下山下さるべしこ。濱 仰に母上正体なく。エ

(221)

、聞わぬぞや空海。焼野の雉子夜の鶴。子を憐まぬ者なきに。母戀し共思はずに。歸れこは胸欲な
たこへ控まもて有らふ共我子のひらきし此山なれば。俱に登らんいざしく。又愛情の雲くも成り。恩愛
ほむらは天にのほり。劔の雨も降らばふれこ。胸をこがせる嘆なげ志のあくねん。久く地ち 徳又ほうごあぐ
みながら。詞ことば 是は又けうがる御無体。大師様にお逢ひなされたらモウ是でたんのふ。サアお歸りこ
手を取つて下れば。空も晴わたり。濱なみ 春の日かけの長閑なる。さはいへ名ごりこ立戻れば。又も巖
動はたゝがみ。無念の面色かほ髪さか立ち。血ばしる眼は夜刃ややのごこく峻たけ。岩壁いんぺき事こともせず。走り登
つて大岩を。兩手にむんづこ引抱たて。詞ことば 我子の住める山中へ登り得がたき女の身も。無念の一心是
をゑいやつこ聲かけて。地ち 堅かたき巖いわも捻廻ねます、我慢がまんの力ぞおそろしき。巴つば地ち 大師大きに歎かせ給ひ。
詞ことば コハあさましき御ふるまひ。外面ひがへ如苦ごと薩さつ内心こころ如夜叉やしゃの。しるしを爰に見せ申さんこ。地ち 御手を取
て平かなる石面に打向ひ。母の面影姿見こ。うつせば不思議ますかゞみ。額ひたひに枯木こぼの角生つのひた立ち。ま
なこは日月鬼形きぎやうのかんばせ。濱なみ はつこばかりにはち入つて。さしも我執がしやくの母君も。忽ち發起はつちに正氣

こなり。詞ことば ハア、あさましや恥かしや。我子をしたふまよひより。心みだれてさまよひこ。地ち 悪業
なせしも夢うつ、佛の御罰ごばつおそろしやこ。今さら懺悔ざんげの御涙ごなみに又立寄れば不思議やな。菩薩ぼさつのかた
ちあらはれたり。巴つば地ち 大師歡喜くわんぎの御聲ごこゑにて有がたしく。詞ことば 母上正氣ぼじやうきこなり給ふも是皆佛の御慈悲
ぞや。是より麓ふもとなる慈尊じそん院いんに御入有て。二世安樂あんらくの快樂くわくあれ。地ち かたみは是こ御袈裟けさを。傍わきなる巖
に打かけ給ひ。まつた徳又への紀念は是こ。あたりに生ひたる小草を取。詞ことば 我したはしき折々は此
草を水に浮め。緑の色こなる時は對面するこ思ふべし。地ち 千代萬代もかはらじこあたへ給ひし一草
は。萬年草まんねんそうこて今の世も。高野の山たかのやまに生しける。久く地ち コハ有がたしこ押いたゞき。名残はつきじも
ふおさらば。母上様にも御立ごたこ。濱なみ す、めには是非なき親子の道。四鳥よつとりの別れ。音ねにぞなく。三人佛
法僧ほつぽうそうや經讀けいよみ鳥とり。それは三光さんこう三鈿さんてんの松。微妙の橋や玉川たまがわに。なびく蛇柳へびやなぎなけ卒塔婆そつたば。押上岩おしあがりやねぢ岩
や袈裟けさかけ岩や鏡岩かがみい。ひかり。かゞやく萬燈まんとうに。法の燈とうし火明ひあきらけき佛の教おしへぞ有かたき、

文化四丁 年二月廿三日

右淨瑠璃(いろは物語)は貞享元甲子年宇治加賀縁相勤

廿八ヶ年後新いろは物語と近松門左衛門増補して竹本

義太夫相勤今百ヶ年におよひ其遺れるを拾ひ再版せし

むるものなり

作者 佐川藤太

戯曲弘法大師 (終)

(234)

大正十一年十月十六日印刷
大正十一年十月廿五日發行



(定價金壹圓三拾錢)

編輯兼發行人 上田秀道

大坂市北區天神橋筋六丁目六十番地

印刷人 川人長龍

大坂市北區天神橋筋六丁目六十番地

印刷所 實文印刷株式會社

發行所 高野山時報社

發行部 實文印刷株式會社

175
6

終

